

ICF活用事例3:認知障害の患者さんへのアプローチ

甲州リハビリテーション病院 森 彰二 関谷宏美

はじめに

高齢化社会に伴い、認知障害の患者さんが年々増加しています。認知障害の患者さんは、問題行動がクローズアップされやすく、それに対して対症療法を実施しますがなかなか有効な支援を見出せない状況です。ICFはこのような場合にどんな力を発揮するのでしょうか。

問題行動に振り回されるスタッフ

交通事故による脳挫傷により記憶や認知の障害を負ったYさん(64歳)は、当院に転院してきたとき、非常に混乱した状態でした。自分の置かれている状況が理解できず、思ったことをそのまま行動に移していました。職員に対して孫に話しているつもりで自宅のことを聞いてきたり、自分の部屋がわからず、他の患者さんの部屋で寝てしまったり、トイレの場所がわからず、廊下で排泄してしまうことがありました。また、自発的に起きて活動することが少なく、促しが無いとベッドで寝てばかりいました。

他人のベッドで寝たり、廊下で排泄したりする行為は、他の患者さんを驚かせてしまうため、問題点としてクローズアップされました。そして「問題行動をいかに無くすか」という議論が交わされました。しかし、問題点にのみ焦点を当てた対応では解決策が見出せず、Yさんの全体像を把握する必要があることに気づきました。

山梨版ICFシートによる全体像の整理

Yさんの全体像の整理のために山梨版ICFシートをまわってみると以下の点に気づきました。①注意、記憶及び見当識の障害が中核障害として存在し、現状の認識と新しいことの学習が困難なこと。②健忘によりYさんの自分の認識が約7年前の状況であること。③病院という画一的な構造とスケジュールの生活は、学習が進みにくいこと。④自発性の低下により整容や入浴などのADLは促しが必要であったが、状況が理解できると動作はすべて可能であること。⑤来客への対応など対人関係の取り方が良好であったため、妻を始めとする関係者が、Yさんの障害について理解しにくかったこと。⑥事故前のYさんは、博学で温厚で非常に多趣味であったこと。

これらによりYさんへのアプローチの方針として以下の3点を挙げました。①Yさんが興味を示す以前の趣味を取り入れて活動性を高め、体力を改善すること。②Yさんが病前からなじみのあるものを用意したり、視覚的に状況を捉えやすい環境を用意して学習を促すこと。③妻に症状を理解してもらいYさんの学習に協力を得ること。以上3つの方針をたてアプローチを開始しました。

アプローチの経過

作業療法に将棋やゴルフなど以前趣味としていたことを導入すると、注意や集中力が向上してきました。Yさんが最も興味を示したのは革細工でした。革細工で、以前の趣味だった狩猟用のナイフのケースを作ったところ、集中力や活動性がぐんと向上しました。病棟の自分の部屋がわかりやすいように自宅

の玄関に飾ってあった写真を病室の前に飾ったり、自宅で愛用していた日常用具を部屋に置いたりしました(図1)。自室で寝ているときには、ポータブルトイレをセットしておき、探さなくても便器がすぐに視界に入るようにすると便器を使用するようになりました。トイレや風呂などは、入口のシンボルマークを確認してから入ることを習慣づけ、視覚的に場所を認識できるように繰り返し誘導すると少しずつ場所を覚えていきました。しかし、ひとたび未学習の場所になると混乱してしまい、来客を病院の玄関まで送った後、迷子になるようなことがありました。そこで妻にYさんの認知の状況と学習したことを1つ1つ伝え、新しい学習課題に対する関わり方を学んでもらいました。妻がYさんとの接し方を理解するにつれ、Yさんは妻に対していらだつことが無くなり、夫婦2人で少しずつ新たな課題を学習できるようになりました。同時に、自宅への外泊を試みたところ、混乱は少なく在宅生活が可能となりました。



図1) わかりやすい環境の整備

ICFによって

入院当初、担当職員達は、Yさんの状況を自分達の視点から捉えようとしたため、問題行動に注目していました。しかし、ICFフォームでYさんの全体像を把握することで、問題行動の背景にある心身機能・構造の要因がわかり、Yさんが周囲をどのように認知しているのか捉えなおすことができました。記憶と認知の障害のあるYさんにとって、病院という画一的な構造・画一的な生活スケジュール・画一的なユニフォームの職員という環境は、非日常的な混乱しやすい環境であることがわかりました。Yさんの認知の視点からの支援の組み立てと、Positiveな側面や個人因子を活用したYさんに受け入れやすい環境設定や情報提供を行うことで、効果的な学習支援ができました。

最後に

4回にわたるICFの特集で、山梨版ICFシートと活用事例の紹介を行ってきました。ICFシートを利用して情報を整理すると、対象者の生活像を多面的に理解することができます。また、悪いところだけでなく、良いところにも目を向けて、その人らしい生活の目標やプログラムを作成することができます。これからも皆様のご意見を伺いながら、ICFをさらに有効に活用する方法を検討していきたいと思えます。

で生活を豊かにしよう!! (最終回)

山梨版ICFシート

事例3: 認知障害の患者さんへのアプローチ

